

特42

557

山登琴曲集

255

531

074543-000-9

特42-557

山登琴曲集

山登 松齡/編

M45

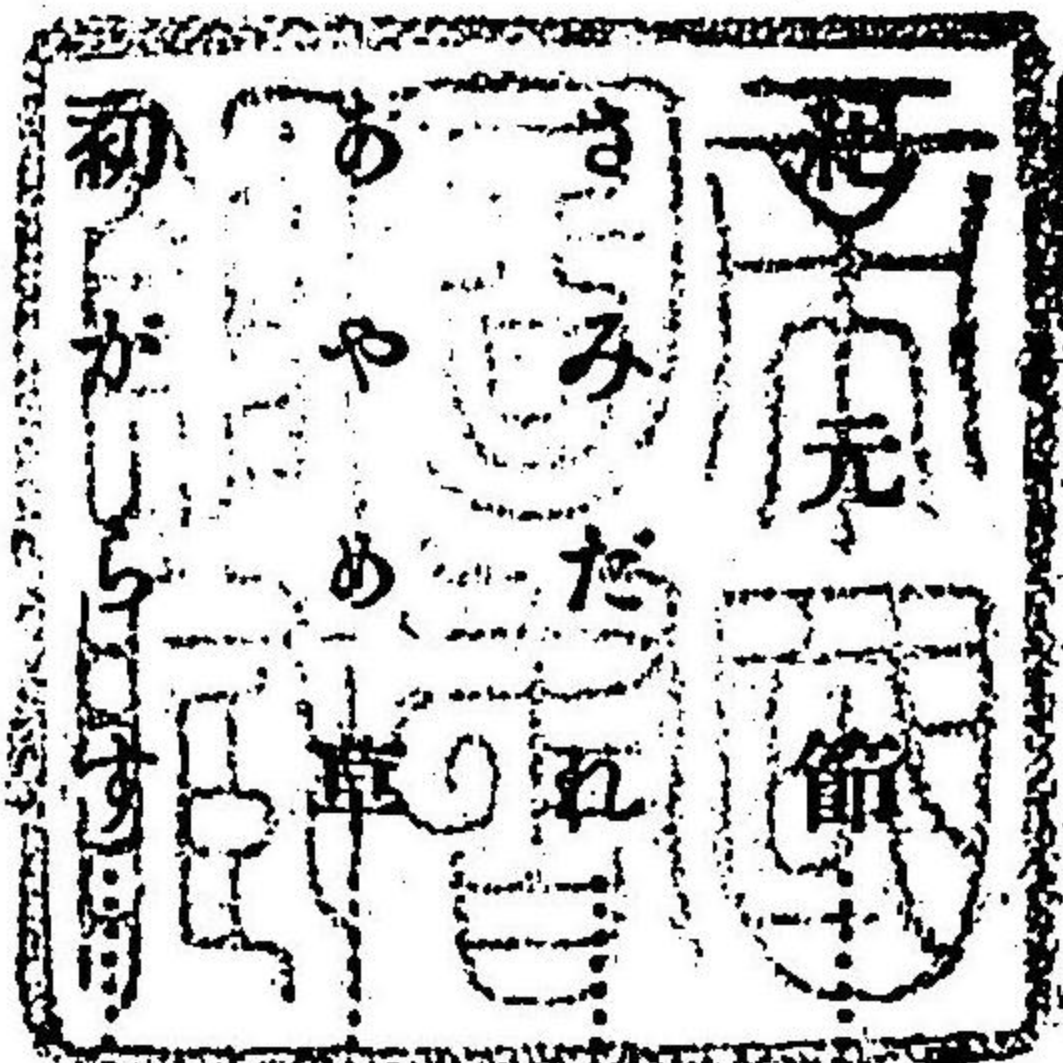
CEI-1926





特42

557



目次

四季の遊	十一頁
千歳の春	九頁
護國歌	八頁
菊の友	六頁
初がしら	五頁
あやめ草	四頁
さみだれ	二頁

5. 10

目次



白の聲……………十四頁

田植の幸……………十六頁

竹生島……………十九頁

國の基……………二十三頁

石山源氏上……………二十七頁

石山源氏下……………三十一頁

梅が枝……………三十五頁

無聲音……………四十頁

目次終

# 山登琴曲集

## 紀元節

三平調子  
三絃二上リ

三代目山登松齡作

前彈シテ雲に響ゆる。高千穂の。ツレたかねお

るしに草も木も。なびきふしけん。大御代

を。あふぐけふこそ。たのしけれ合

シテ海原なせる。はにやすの。ツケ池のおもよ

り。猶廣き。ツケ恵みの波に。浴しよを。ツレ

あふぐけふこそ。たのしけれ合



ワケ天津ひつぎの。高御くら。ワケ千代萬代に。  
 動なき。ワケもとる定めし。其神を。ツレあふ  
 ぐけふこそ。たのしけれ合  
 ツレ空に暉く。日の本の。よろづの國に。た  
 ぐひなき。國の御柱。たてしよを。あふぐ  
 けふこそ。たのしけれ。

さみだれ

三琴平關子  
三絃二上リ子

千代田檢校作

シテなよ竹の。ツレ夜の間の夢の。みじかきに。

シテながくしくも。くりかへす。合ツレ軒の糸  
 水。いとどしく。ワケまきの板戸の。あけく  
 れに。ワケしめりがちなる。寢屋のうち。ワケ  
 うつらくとらた、寢の。ワケ枕に遠き時鳥。  
 ワケ雲間ほのかに。忍ぶ音も。合シテゆかしやま  
 まに。ならぬ身の。ワケうさかずまさる。夏  
 草の。合ワケ鐘をばよそに。聞捨て。ワケまだた  
 き残る。かやり火の。ツレもゆるばかりの物  
 思ひ。はる、まもなき夜半のさみだれ。



あやめ草

三琴雲井調子  
三絃三上子

千代田檢校作

シテ玉くしげ。ツレ道の榮に。かけまくも。か  
 しこき御代に。すむ水の。恵みに茂る。菖  
 蒲草。合シテいつの五月に。ひきをめて。ツケ  
 か袖さへ。匂ふなる。合ツレ露の朝日の。影清  
 み。さながらかざしの。玉なれや。みどり  
 の末葉。うちなびき。ツケそよとかきりも。  
 なつかしながら。ツケ敷ならぬ身の。やるせ

なや。ツケめならぶ人の。あまたとは。ツケそ  
 れも。ツケ雫の。ツレたねかひな。合シテ敷たへの。  
 枕にかよふ。月影に。ツケおなじ匂ひの。小  
 夜風も。ツケ何かあやめの。長き根は。ツレ幾  
 千代かけて。軒にふくらん。

初がらす

三琴平調子  
三絃二上子

三代目山登松齡作

前彈シテ新玉の。ツレ年のをだまき。くりかへ  
 し。シテ盡せぬ君が。大御代を。ツケ祝うて家



ごと。門毎カドノヘニに合ハ八ハチ一イツ律リツ下ゲル九ク二ニ律リツ上ウル（片雲井）シテ朝日アサヒの御旗ミハタ。  
 棚引タナヒキて。ワケ朝日アサヒ影カゲそふ。のどかさは。ワケ初ハツ。  
 からすさへ。うちとけて。シテかほりくと。  
 鳴聲ナゲに。ツレけさくる春はるを。つけわたるらん。

### 菊の友

三琴半ミツコトノナ本調子ホンテウジ

千代田檢校作

前彈マエノウタシテ朝あもよひ。ツレ清きよき流ながれを。とめくれ  
 ば。合あうつろふ影かげに。ほぢもみぢ。合あ思おもひや色いろ  
 に。あらはれん。穂ほに出いで。シテ尾花おなはまね

く。妻つまこふ鹿しかは。音ねにたて。ワケ忍しのびあへ  
 ぬが。とががかひな。合あワケ誰たが秋風あきかぜを。こゝろ  
 から。ワケうらみ顔かほなる。くづかつら。ワケく  
 るてふ宵よひも（八一律上ル九二律下ル）人ひとだのめ。ワケいつか  
 まことまことを菊きくの露つゆ。シテおちても匂におふ。忘れ水わすれみづ。  
 ワケ結むすびそめしが。縁えんのはし。ワケ末白菊すましろきくの。  
 齡よはひをかけて。ワケ替からぬ中なかは。相生あひまの。ワケま  
 つの下風したかぜ通とほひきて。ツレ調しらべも千代ちよの聲こゑすめ  
 り。合あツレ其玉琴そのたまこの。たまさかに。シテ結むすぶ契ちぎり



は。秋しらで。ワケ根さへかかれめや。山路の  
菊の。ツレ今を盛りの。香にめてて。合夜るさ  
へ月にわけなる。袖の白露。もすその雫  
ほさて幾代の。秋やかさねん。

### 護國歌

三琴本調子

三代目山登松齡作

前彈シテすめら御國の。まりたちを。ツレこ  
ろにとめて。誰もみよ。シテ文武百官農家商  
ワキとほつ御親の昔より。シテおのがさまく

學びえし。ワケ道にひたすら。身をゆだね。  
ワケ其職業は。替れども。シテ向ふこゝろは一  
と筋に。ツレ強兵富國を。めあてとし。合ツレ一  
命捨てはたらくも。シテ獨りの君を。守るた  
め。ツレ一の國を保つため。

### 千歳の春

三琴本調子

千代田檢校作

前彈シテ新玉の。ツレ年の初子や。鶯の。聲と  
しきけば。咲そむる。合ツレ梅の匂ひの。吹く



風かぜに。たぐへてぞやる。朝夕あすけの。シテこゝろ  
 盡つくしや。わがせこが。ツケ頃ころも春雨はるまゆ。ふるご  
 とに。ツケ野邊のべの若草わかしら。色いろはえて。ツケつまこ  
 もれりと。なくきゞす。ツケ空そらも長閑のどかに。雁かり  
 金かねの。ツレ霞がすみの内に薄墨うすすみの。文字いじかとはかり。  
 かけるなる。四方よちのけしきの。ゆかしさに。  
 家路いへぢ忘わするゝ。このもとや。合あツ。幾代いくよ子の日ひの。  
 姫ひめ小松こまつ。シテひかるゝ袖そでの初若菜はつわいな。ツケすゞな  
 すゞしる。見みそめてそめて。ツケせ  
八一律ヒル九二律下ル  
三絃二上リ

りにせかるゝ我心わがこころ。ツケ妻つまとなづなの。よし  
 さだまるならば。合あツ。玉たまのはこべら。二人ふたりり  
 が中は。シテ五いつぎやうのきひつ。神かみかけて。  
 合あツ。替かりはせじと。諸もろ共に。ちかひを立たし。  
 佛ほとけのざ。合あ。草くさのかずく。つみ遊あそぶ。合あ。春はるのみど  
 りの。うらくに。ゆかり句はなへる。すみれ  
 草くさ。ちぐさの色いろと。今いまぞしらるゝ。

四季しきの遊あそび

翠あざ半はん雲雲井井  
三三絃絃三三下下リ

三代目山登松齡作



前彈 シテ 新玉の。年立かへる。朝がすみ。合ッレ  
 たなびかれ行く。小松原。野邊のあそびも。  
 初若菜。梅が香さそふ春風に。鶯來鳴く。  
 軒のつま。合ッレ花の香に。染しくは。きの  
 ふにて。苗代水も。豊かなる。合ッレかはづな  
 きたつ。こゝかしこ。紫匂ふ。かきつば  
 た。おなじゆかりの。藤つゝじ。合ッレかく  
 ばかり。寝ぬ夜重ねて。待つ物を。吹さ  
 時鳥つれなくも。三絃本調子合ッレ早秋風の。吹さ

そふ。星の夕べは家々に。シテなびく若竹。  
 たんざくの。色の千草の。花ざかり。  
 野邊は虫の音。數々に。分つゝあそぶ。  
 二度の月。賤がきぬたの。音すみて。合  
 八二律上ル九二律下ル 三絃二上リ 初霜結ぶ。神無月。時雨と共に。  
 散る木の葉。池の水に。水鳥の。シテうきね  
 をわぶる。よなくの。寒さ忘るゝ。うづ  
 み火の。合ッレ光り長閑に。たがかども。年來  
 のまつに。春やむかへん。



# 白の聲

琴<sub>三</sub>岩戸調子<sub>二</sub> 三<sub>三</sub> 三<sub>二</sub> 上<sub>上</sub> 三<sub>三</sub> 四<sub>合</sub> 三代目山登松齡作

前<sub>レ</sub>彈<sub>レ</sub>おぼる夜<sub>の</sub>。 <sub>ツレ</sub>影<sub>は</sub>霞<sub>の</sub>。 <sub>薄</sub>ものに。  
 こぼれて匂<sub>ふ</sub>。 梅<sub>が</sub>香<sub>の</sub>。 日<sub>數</sub>にうつる。  
 春<sub>く</sub>れて。 <sub>合</sub>六<sub>斗</sub>二<sub>律</sub>下<sub>ル</sub> <sub>(三</sub>三<sub>上</sub>上<sub>上</sub>下<sub>下</sub>)<sub>三</sub> 夏<sub>立</sub>つけふの。 <sub>薄</sub>  
 衣<sub>の</sub>。 <sub>シテ</sub>うす紫<sub>の</sub>。 あふちかけ。 <sub>ツケ</sub>涼<sub>し</sub>き風<sub>に</sub>。  
 秋<sub>の</sub>たつ。 <sub>合</sub>ツレ <sub>薄</sub>霧<sub>な</sub>びく。 <sub>初</sub>尾<sub>花</sub>。 <sub>ツキ</sub>  
 ほのかにうすく。 暮<sub>そ</sub>めて。 <sub>シテ</sub>きうす高<sub>き</sub>。  
 山<sub>風</sub>に。 <sub>ツケ</sub>月<sub>す</sub>む秋<sub>の</sub>。 琴<sub>の</sub>こゑ。 <sub>ツケ</sub>

夜<sub>寒</sub>の雁<sub>も</sub>。 音<sub>を</sub>そへて。 <sub>ツキ</sub>外<sub>面</sub>の木<sub>の</sub>。  
 薄<sub>紅</sub>葉<sub>。三</sub>三<sub>上</sub>上<sub>上</sub> <sub>合</sub> <sub>シテ</sub>いそぐ時<sub>雨</sub>の。 朝<sub>戸</sub>出<sub>に</sub>。  
 庭<sub>の</sub>うす雪<sub>。め</sub>づらしな。 <sub>ツケ</sub>なげの情<sub>の</sub>。  
 筆<sub>の</sub>あと。 <sub>ツキ</sub>墨<sub>り</sub>すからぬ。 玉<sub>づ</sub>さに。 <sub>ツレ</sub>  
 契<sub>り</sub>は何か。 <sub>う</sub>すからん。 <sub>う</sub>すきへだての。  
 賤<sub>が</sub>家<sub>に</sub>。 <sub>合</sub>ツレ <sub>稻</sub>つく白<sub>の</sub>。 <sub>つ</sub>ちのうた。 <sub>シテ</sub>  
 拍<sub>子</sub>も風<sub>に</sub>。 通<sub>ひ</sub>きて。 <sub>シテ</sub>うたふこゑごゑ。  
 おもしろや。



田植の幸

琴平調子ニテ四二律上ル  
三絃二上リ

三代目山登松齡作

前彈シテ里の卯の花や、咲そめて。ツレやま  
 ほとゝぎすの。忍び音も。閨の衣の。うら  
 なつかしく。短かき夜半の。とこよもの。  
 花桶の。うつり香に。きぬぐ慕ふ。後の  
 朝。人目をつゝむ。妹が戸も。シテまだ若竹  
 の。世心づかぬ。乙女がともゝ。打つれて。  
 ツキ小田におりたち。足なみも。ツレ揃ひの笠

に。ひとへ衣。くれなる匂ふ。玉だすき。

八一律下ル九二律上ル(半響井調子)合シテ掛まくも。いともかし

こき。天皇の。ツキ御代明らけく。治まれる。

合シテ九年の五月。陸奥へ。行幸まします。

道すがら。ツケ親しく見をなわせ。給ひしは。

ツケ百姓を。いつくしみ。ツキいたはりましき

す。御心にて。ツレいと有難き。ためしにこ

そ。合ツレそもく我大御國は。もとより百千

足國とて。よるづの物の。たるが中にも。



すぐれて稻の。生たつより。みづ穂の國と  
 もたへたり。穂とは息の根といふこと。  
 息ある内がいちにて。いのちを保つ根本  
 なり。かく大切の。初稲を。シテ神に奉らせ  
 たまふを。新嘗會とぞ申すなる。ツレされば  
 人々もつゝしみて。ゆだねをおろし。苗代  
 に。ワキ五十串を立て。七五三はへて。ツレ水  
 口祭も。おごそかにせよ。シテ三千五百万の  
 たみぐさが。ツレかゝるたふとき。瑞米を。

あくまで食ひ。腹つゞみ。合うちつ御國の。  
 早苗草。年ある秋の。千五百秋。シテ榮え行  
 こそ。めてたけれ。ツレ榮え行こそ。めてた  
 けれ。

### 竹生島

三琴 三下 井

千代田 檢校 作

前彈 シテ 頃は彌生の。中端なれば。ツレ浪もう  
 らゝに。海のおも。霞わたれる朝ぼらけ。  
 静に通ふ船の道。實に面白き時とかや。合シテ



如何いかににあれなる船ふねに。便船びんせん申まをさふなふ。ワキ  
 を、めされ候まかりへ。シテ嬉うれしやさては。三枝本調子さんえほんていし迎むか  
 ひの船ふね。法のりの力ちからとおぼえたり。ワキけふは殊こと  
 更さらのどかにて。こゝろにかゝる風かぜもなし。  
 シテ山やま々の春はるなれや。花はなはさながら白雪しらゆきの。  
 ワキふるか残のこるか時ときしらぬ。ワキ峰かみは都みやこの富士ふじ  
 なれや。シテ猶なほさえかへる春はるの日に。ワキ比良ひら  
 の根ねおろし吹かとても。シテ沖せきこぐ船ふねはよもつ  
 きじ。ワキ旅たびのならひの思おもはずも。ワキ雲井くもいの

よそに見みし人ひとも。ワケおなじ船ふねになれ衣ころも。ソレ  
 浦うらをへだて、行く程ほどに。竹生島たけうぶしまにぞ着つにけ  
 る。合あシテ承うけたまはり及びおよびたるよりも。いやまさりて  
 有あり難がたし。ふしぎやな此島このしまは。女人にょにん禁制きんせいと承うけたまは  
 りてありしが。あれなる女人にょにんは何なにとて参まゐら  
 れ候まかりぞ。ワキそれは知しらぬ人ひとの申事まをすことなり。忝かたじけ  
 なくも此島このしまは。九生きゅうじやう如來にょらいの御ごさいたんなれ  
 ば。誠まことに女人にょにんこそ参まゐるべけれ合あシテなふそれ  
 までもなきものを。ソレ辨財べんさい天てんは女にょたいにて。



其神徳もあらたなる。天女と現じおはしま  
 せば。女人とて隔なし。たゞ知らぬ人の言  
 葉なり。合實にか程うたがひも。あら磯島の  
 松蔭を。便によするあま小舟。シテ我は人間  
 にあらずとて。社壇の戸びらを押しひらき。  
 御殿に入らせ給ひければ。ワキ翁も水中に入  
 かとみえしが。白波の立歸り。シテ我は此海  
 のあるじぞと言捨て。ツレ又も波にいり給ふ。  
 ふしぎや虚空に音楽聞え。花ふりくだる春

の夜の。樂ッ月ツキに暉あやく乙女をとめの袂たもとかへすぐ  
 も面白おもしろや。シテ夜遊やあそびの舞樂まがくもや、時過ときすぎて。ワキ  
 月つきすみわたる海うみづらに。合ッ浪風なみかぜしきりに鳴な  
 動どうして。下界げがいの龍神りゆうじん顯あらわはれ出い。合光あひかりりも暉あやく  
 金銀きんぎん殊玉しゆぎよくを。かのまれ人ひとに。捧まこるけしき。  
 有難ありがたかりける。奇特きせきかま。

國くにの基もと

琴半岩戸關子ニテ三ヲ一律上ケケヲ三律上ル  
三絃二上リ

琴四合  
三絃一合

三代目 山登松齡作

前彈まえだんシテ仰あやげやあふげ。あめつちの。ツレあら



んかぎりほ榮えんと。天津御神ののたまひ  
 し。みことのまゝに高御座。動かぬもとる  
 たてそめし。神武のみかどは。智仁勇。  
 ツレそなはりませる君にして。皇祖瓊々杵の  
 尊より。日向の國の高千穂に。宮居さだめ  
 てまつりごと。しきたまへれど恩澤に。ま  
 だうるほはぬ國おほし。  
六斗二律下(巾三律下)(半雲井園子)  
 三絃一上(三下リ)  
 邑長たがひにあらそひて。罪なき民  
 のくるしむを。すくひたすけて天業を。

おしひろめんとをしくも。おぼしたゝ  
 して諸皇子と。大御軍をひきゐまし。西  
 のはてよりはるくと。ひんがしとしてい  
 てたゝす。皇稜威の風に草も木も。なび  
 きしたがひ。丹敷戸畔。兄猫はじめ。  
フケ兄磯城等も。フケ長髓彦もほるひけり。三絃本調子  
 大和の國の橿原に。都をさだめ。宮  
 ばしら。ふとしきたて。御位に。のぼら  
 せたまひもろくの。つかさをさだめ天



の下。ツケしづめ給へば大八洲。また波風の  
 さわぎなし。シテ國民よるこびまつるひて。  
 初國しらす天皇と。ツレあがめたふとみ天地  
 の。わかれしごとくあきらかに。君臣の分  
 さだまりぬ。八一律上ル九一律下ル 三絃二上リ地球の中に國とい  
 ふ。國はあれどもうらやすの。國の名おひ  
 てとつ國の。人もうらやむたぐひなき。國  
 をたてたる天皇の。大御勳功にくらべては  
 畝傍の山も高からず。埴安の池もふかゝら

ず。三千餘萬の皇國人。とほつ親よりかづ  
 かづの。うけし恵みを忘れざれ。く。

### 石山源氏上

琴雲井調子  
三絃三下リ子

千代田檢校作

シテ衣もおなじ苦の道。く。石山寺に参らん。  
 フキ是は安居院の法印にて候。シテ我石山の觀  
 世音を信じ。常にあゆみをはこび候。フキ今  
 日も又。参らばやと思ひ候。ツレ時も名も花  
 の都を立出て。嵐につるゝ夕浪の。白河お



もて過行けば。音羽の瀧をよそに見て。關  
 のこなたの朝がすみ。合ツれされども残る有明  
 の。影もあなたに鳩の海。實におもしろき  
 氣色かな。合ツれさざ浪や。志賀唐崎の一ツ松  
 鹽やかねども浦の浪。たつこそ水のけふり  
 なれ。く。三枝本關子シテかくて御堂に参りつ。  
 補陀樂山も是かとよ。ワキ四方の詠めも妙成  
 や。ワケ瑠璃や瑪腦の石山寺。ツレこがねいと  
 ごを地に敷て。木木はたからの花盛り。シテ

はるかに月の影清く。光り暉く玉の堂。ツレ  
 こゝ安樂の御國ぞと。ワキ聞もたへなるふだ  
 ん香。シテ染り重るすみ色の。ワケ衣の様や尊  
 けれ。ワケ衣の様や尊けれ。シテなふく。あ  
 れなる御法の人に。申べき事の候。我は紫  
 式部なるが。此山にこもり。あだ夢の根を  
 し草なる言葉の末。ワキ源氏六十帖に書つら  
 ぬ。ワケつたなき筆にまかせつ。名のかた  
 みとはなりたれど。ワケかの源氏に供養をせ



ざりしにより。ワケ願くは供養を御のべ。わ  
 があとをもとひてたび給へや。ワケ安き間の  
 御事。御願に任すべし。シテ三三三下リ 聲みつや。  
 法の山風ふけ過て。ツレ光りやはらく春の夜  
 の。眠をさます鐘の聲。ワケ光源氏の跡とは  
 ん。ワケ光源氏の跡とはん。シテあら有難や嬉  
 しやな。何をか布施に参らせ候べし。ワケい  
 や布施などとは思ひもよらず。ワケありし都  
 の御手づさみ。昔にかへす舞の袖。かたみ

にまうて見せ給へ。シテいかて仰を背くべき。  
 耻かしながら舞んとて。ワケもとより其名も  
 紫の。ワケ色めづらしき薄衣の。日も紅の扇  
 をもち。よわくと立あがり。ツレあはれ胡  
 蝶のひと遊び。夢のうちなる舞の袖。うつ  
 つにかへすよしもがな。

### 石山源氏下

翠半岩戸子  
 三絃二上リ  
 三翠一合

前彈 シテ抑桐壺の。夕の烟すみやかに。法性



の空に至り。ワキは、木々のよるの言の葉は。  
 終に覺樹の花ちりぬ。ワケ空蟬のむなしき此  
 世をいとひては。ワケ夕顔の露の命を觀じ。  
 ワケ若紫の雲のむかひ。ワケ末摘花の臺に坐せ  
 ば。ワケ紅葉の賀の落葉も。よしやたゞ。た  
 まく佛意に逢ながら。ワケ柳葉のさして往  
 生を願ふべし。ワケ花散里に住とても。愛別  
 離苦のことはり。まぬがれがたき道とかや。  
 ワケ唯すべからくは生死流浪の。須磨の浦を

いて。ワケ四知圓明の。明石の浦に。みを  
 づくし。ワケいつまでも有なん。唯蓬生の宿  
 ながら。菩提の道を願ふべし。松風の吹と  
 ても。ワケ業障の薄雲は。はるゝ事さらにな  
 し。ワケ秋の風消ずして。しま忍辱の。ワケ藤袴  
 上品蓮臺に心をかけて。ワケまことある七寶  
 莊嚴のまき柱のもとにゆかん。ワケ梅が枝の  
 匂ひにうつる我こゝる。藤のうら葉に置露  
 の。ワケ其玉葛かけしばし。ワケ槿の光り頼ま



れず。あしたには。六十一律下(雲井欄子) 三柱一上(三下) 梅檀の陰  
 にやどり木。名も高きつかさ位を東屋の。  
 うちにこめて樂しみ。榮を。浮舟にたと  
 ふべしとかや。是も蜻蛉の身なるべし。  
 ツレ狂言綺語をふりすて。たすけたまへと  
 諸共に。鐘うちならし回向もすてにをほり  
 ぬ。よくく物をあんずるに。紫式部と  
 申せしは。彼石山の觀世音。かりに此世  
 にあらはれて。かゝる源氏の物語り。是

も思へば夢の世と。人に知らせん御方便  
 實に有難きちかひかな。實に有難きちか  
 ひかな。

梅が枝

三代目 山登松齡作

或は若有聞法者。く。無一不成佛と説く  
 一度此經を聞人成佛せずといふ事なした  
 頼めたのもしや吊ふ燈の陰よりもけしたる  
 人の來りたり夢か現か見たりともなき姿哉。



ふしぎやなみれば女性の姿なるが舞の衣裳  
 を着しさをがらをつとの姿なり扱は肖つる  
 富士が妻の其幽霊にてましますか。實にや  
 碧玉の寒き蘆きりふくるにたつすとは今身  
 の上にしられさふらふぞや。去ながら妙な  
 る法の受授にあはゞ變成男子の姿とはなど  
 や御覽じ給はぬぞ然らば御吊ひの力にて  
 うかりし身の昔をさんげに語り申さん去に  
 ても我ながらよしなき戀路にかされてな

がく悪趣に墮しけるよさればにや女心の亂  
 髮ゆひかひなくも戀衣の妻の筐を戴き此狩  
 衣を着しつゝ常には打ちし此太鼓のぬもせ  
 ず起もせず涙敷妙の枕がみに残る執心をば  
 らしつゝ佛所に到るべし嬉しの今の教や思  
 ひ出たる一念の發るはやまふと成りつゝつ  
 がざるは是藥なりと故人の教なれば思はじ  
 思はじ戀わすれ草も住吉の岸におふてふ花  
 なれば手折やせまし我心契りあさぎぬの片



思ひ執心をたすけ給へや。實に面白やおなじくは懺悔の舞をかきて、愛着の心をすて給へ。いざくさらば妄執の雲霧をはらふ夜の月もなかば成り夜半樂をかきてん心も共に住吉の松の隙より詠むれば浪もてゆへる淡路がた。沖もしづかに青海の。青海波の浪返し。かへすや袖の折を得て。軒端の梅に鶯のきまなくや花の越殿樂。うたへやうたへ。梅がえ。梅が枝にこそ鶯はすをくへ

風ふかば如何にせん花に宿る鶯面白や鶯の鶯の聲に誘引せられて花の陰に來りたり。我も御法に引誘はれてく。今目前に立まふ舞の袖是こそ女のをつとを戀ふる想夫戀の樂の鼓うつゝなの我肖さまやな思へばいにしへをくかたるは猶も執心ぞと申せば月もいり音樂のおとは松風にたゞへて有りし姿はあけ暮に面影ばかりや残るらんく



無聲音

三代目 山登松 齡作

あかねさす日ひもいとくらくせみの小河なにき  
 りたちてへだての雲くもとなりけりあらいた  
 はしやたまきはる内裏うちに朝夕あすとのるせし實まね  
 美卿とみきょうやすゑとも卿きやう壬生おに澤さ四條しじょうひがし久世くぜそ  
 の外ほかにしきの小路こうじ殿どのよをうき艸くさのさだめな  
 き旅たびにしあれば駒こまさへもすゝみかねてはい  
 はいつゝふりしく雨あめの絶間たえまなくなみだに袖そで

のぬれはてゝこれより海うみやまあさぢが原露はらつみ  
 しもわけてあしがちる浪花なみのうらにたくし  
 ほのからき浮世うきよはものかはとゆかむとすれ  
 ば東山峯ひがしやまのねの秋風あきかぜ身みにしみて朝あさな夕ゆふなに聞きな  
 れし妙法めうぼう院いんのかねの音ねもなにと今宵こんやはあは  
 れなるいつしかくらしき雲くもきりをはらひつく  
 してもゝしきの都みやこの月つきをしめて給たまふらんく。



255  
531

著作  
所有

明治四十五年五月五日印刷  
明治四十五年五月九日發行

定價金壹拾五錢

編輯者  
兼發行者

東京市日本橋區濱町二丁目八番地  
三代目山登松齋相續人  
山登美



印刷者 宮崎新三郎  
東京市日本橋區橫山町二丁目一番地

印刷所 共榮堂印刷所  
東京市日本橋區新右衛門町十三番地

# 山登琴曲集

終

